

岡崎パネル調査の文の長さ 2

—繰り返しデータの斜め表示技法—

Length of Sentences in Panel Surveys of Okazaki 2

Slant representation of repetitive survey data

(Ver. 1.1)

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

Comprehensive Research

Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

井上史雄 ・ 柳村裕

INOUE Fumio, YANAGIMURA Yu

平成 27 年 6 月 24 日

24 June 2015

目次

1. はじめに.....	2
2. パネルサンプルの概要.....	2
2.1. 第1, 2, 3次全話者の人数と6分類構成.....	2
2.2. 第1, 2, 3次全話者の文の長さの推移.....	3
2.3. 第1, 2, 3次パネル話者の文の長さの平均値.....	4
3. 第1, 2, 3次パネルの個別考察.....	7
3.1. パネル調査の文の長さ 第1, 2, 3次全話者.....	7
3.2. パネル調査表示の技法.....	8
3.3. パネル調査の文の長さ 第1, 2次話者と第2, 3次話者.....	8
3.4. パネル調査の文の長さ 第1, 2次, 第2, 3次の男女差.....	10
4. 長さの追跡調査(12項目).....	12
101 道教え.....	12
102 電報振込.....	13
103 荷物預け.....	14
104 傘忘れ.....	15
105 先生.....	16
106 電灯新聞.....	17
107 議事堂.....	18
108 医者.....	19
109 席譲られ.....	20
110 おつり.....	21
111 傘貸し.....	22
5. 結論 現代の言語変化.....	23
参考文献.....	23

1. はじめに

本編は、「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」の逐次報告であり、国立国語研究所がこれまで半世紀以上にわたって継続した岡崎敬語調査に関する資料集である。今回はパネル調査（同一人物追跡調査データ）の表示法について報告する。シリーズの資料集14で使った表示技法に改良を加えて、全体の様子を把握しやすくした。一人の異なった時点の調査結果に複数の表示箇所を与えて、斜めの線で結んで、右上がりか右下がりかで増減を表示して、趨勢を探る手法を採用した。文の長さが長くなる傾向がきれいに示された。

資料集14では、第1, 2, 3次を通した結果を表示した。この資料集15では第1次と2次の共通サンプル、第2次と3次の共通サンプルに分けて、表示する。なお1, 2, 3次を通して協力の得られた20人は、双方のサンプルにダブって表示される。

資料集14で述べたことの繰り返しは、可能な限り避ける。

2. パネルサンプルの概要

2.1. 第1, 2, 3次全話者の人数と6分類構成

まず岡崎敬語調査全体像を見るためにランダムサンプルとパネルサンプル（追跡調査話者）全員の文の長さ総平均の推移を図1にグラフ化した。これまでに提示したことのないグラフである。これまで使ったのは4本線のグラフで、第1次調査報告書（国立国語研究所1958）ではR（Reported random, 本グループ）サンプルとC（Control, College, 比較グループ）サンプルの双方を示した。第2次調査報告書（国立国語研究所1983）ではこのうちR（Reported random, 本データ）サンプルと第2次ランダムサンプルとの比較を重視していた。今回は第1次のRとCを同等に扱って図化した。また第2次、第3次のパネルサンプルは、ランダムサンプルと性格の違い（特に年齢層の偏り）が大きいので扱いに困るが、このグラフ以降は6本線のグラフとして組み入れる。ただし時代の趨勢を読み取るには参考資料として扱うべきなので、図化に際して目立たなくして、工夫を加えた。

第1次調査についてはR（Reported random, 本グループ）サンプルを太く大きく示した。第2, 3次調査についてはR（Random）サンプルを太く大きく示した。パネルサンプルは細く小さくした。3回の調査の傾向をつかむには、3本の太い線に頼るべきである。同じ人たちが19年後、36年後にどう変わったかを見るときには細い線を見ることになる。各調査時の全体像と比べるときには、太い線と比べることになる。細い線は参考にとどめることが望ましい。

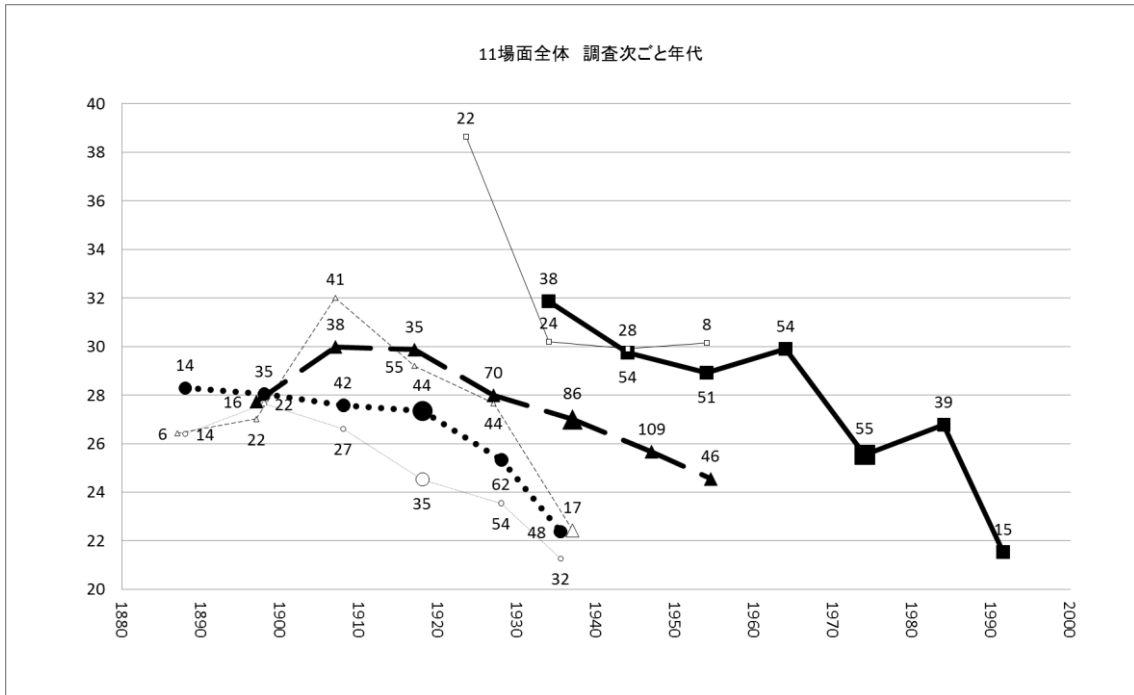


図1 文の長さ 6本線グラフ 11場面総平均

図1には、各セルの人数も示した。ただし第3次調査の90代(1人)は人数が少なく、グラフにした場合に極端なパターンを示す可能性があるため、80代に統合した。第2次調査パネルサンプルの80代の6人と、第3次調査パネルサンプルの50代8人は人数が少ないので、平均値でみるときは用心すべきである。他のセルは最低でも14人以上なので、惑わすパターンを示すことは少ないと思われる。

2.2. 第1, 2, 3次全話者の文の長さの推移

図1では文の長さの推移を示している。読み取りを試みよう。太い線3本(第1,2,3次調査のランダムサンプルR)を見ると、これまでの言語変化論で気づかれていなかったパターンが示された。すべて右下がりであり、1本だけ見たら、若い世代に向けて減っている、減少、衰退を期待する。しかし3回の調査で、同じ右下がりパターンを繰り返しながら増えている。典型的な「成人後採用」のパターンである。

参考のために他の3本の細線も見ると、第1次Cデータ(○細線)は、全体としてRデータ(●太線)より短い。話者たちは東京から来た研究者に対するよりは地元の大学生に対して簡潔に答えたようである。第2次調査のパネルサンプル(△細線)は、19年後にほぼすべての年齢層が長くなり、ことにかつての40代(のちの60代)が著しく長くなった。とはいえそれより若い人は、第1次調査時よりも長くなったといっても、第2次のランダムサンプル(▲太線)ほどには長くなっていない。世の中の動きについて行っていない。第3次のパ

ネルサンプル(□細線)の数值はランダムサンプル(■太線)の数值とそれほど変わらない。ただ追跡できた高年齢の人(80代22人)は他の層の数倍の長さで答えている。

「年寄りの長話」という表現が実証されたと言ってよい。どのような要因によって長くなったのかを確かめるのが、今後の課題である。

2.3. 第1, 2, 3次パネル話者の文の長さの平均値

以下この資料集15では第1, 2次の共通サンプル, 第2, 3次の共通サンプルに分けて, 表示するが, このうち第1, 2次の共通サンプルの第1次サンプルは, 図1にそれとして表示されない。「後の世に」第2次のパネルサンプルになるが, 第1次調査のときには予測できないことが理由の一つである。(大衆演劇では「我こそは木下藤吉郎, 後の世の豊臣秀吉なるぞ」などと名乗ることがあったというが, アナクロニズムもいいところで, 占いや予言者でも後の世の名を言うことはできないはずである。)ただし第1次調査がRとCに分かれていなかったら, 第1次のパネルを(第1次のランダムサンプルと重なる形で)表示することは考えられる(『大規模経年資料集14』で示した)。

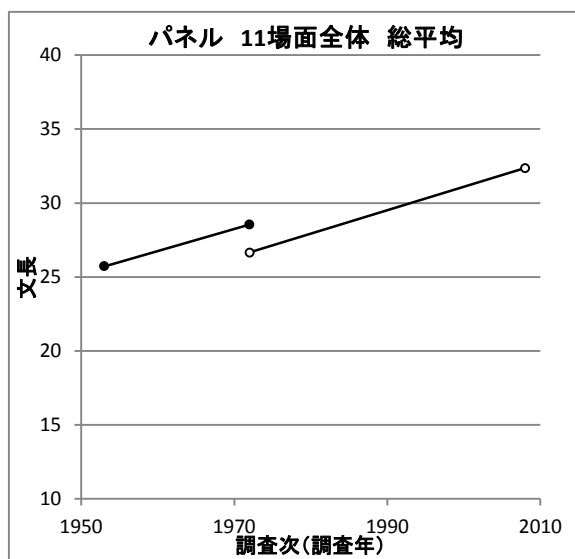


図2 文の長さ 11場面総平均

全体像を見るためにパネルサンプル(追跡調査話者)の文の長さ総平均の推移を図2にグラフ化した。黒塗りマーカーは1, 2次共通, 白抜きマーカーは2, 3次共通のサンプルである。パネル調査の相手全体として, のちの調査で長くなったことが示される。

表 1

1、2 次共通		2、3 次共通	
1 次	2 次	2 次	3 次
1953	1972	1972	2008
25.71574	28.51461	26.65718	32.36722
36.6 歳	55.5 歳	36.1 歳	72.1 歳

また表 1 に数値を示す。1953 年第 1 次調査のサンプルのうち、第 2 次調査に応じた人の平均値は 25.7 モーラから 28.5 モーラに増加した。同様に 1972 年第 2 次調査のサンプルのうち、2008 年第 3 次調査に応じた人の平均値は 26.7 モーラから 32.4 モーラに増加した。わずかの違いであるが、同じ人たちが加齢により（時勢の変化により）長く答えたことになる。

なお各調査時の平均年齢は表 1 に示すようにのちになるほど高くなっている。

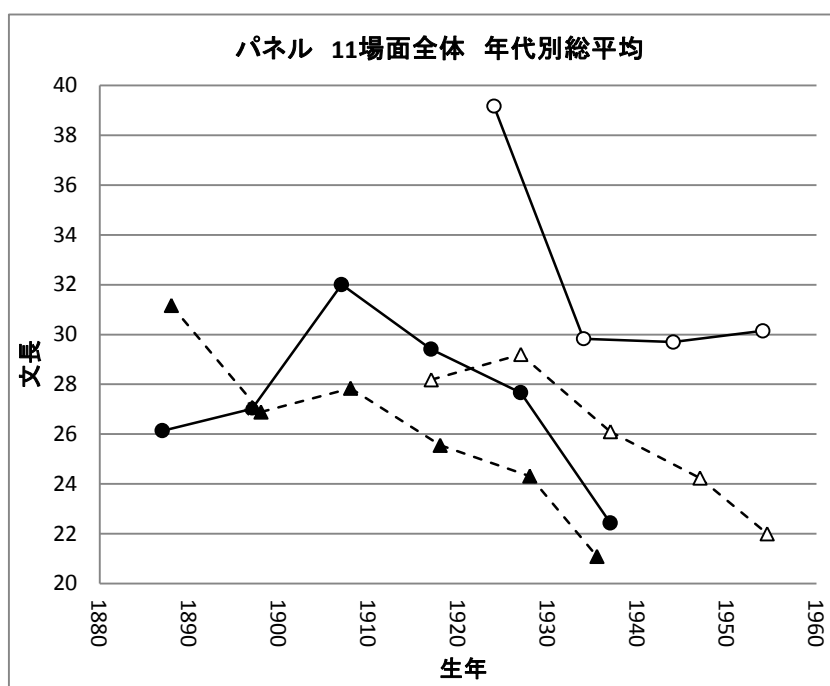


図 3 文の長さ 11 場面総平均 調査時点の平均年齢

散布図の技法により、年代に忠実に図 3 に再提示する。横軸が話者の平均生年を示す。縦軸は文の長さをモーラ数で示す。黒塗りマーカーは 1、2 次共通、白抜きマーカーは 2、3 次共通のサンプルで、同一サンプルのうち早い方の調査次（1、2 次共通の 1 次、2、3 次共通の 2 次）のデータを破線、遅い方のデータを実線で示す。第 3 次調査の 90 代（1 人）は 80 代に統合した。1 次の 60 代（5 人）、1、2 次共通の 2 次の 80 代（4 人）、2、3 次共通の

2 次の 10 代 (2 人) と 50 代 (7 人)、3 次の 50 代 (8 人) は人数が少ないので注意が必要である (他のセルはどれも 17 人以上)。高年層を除くと、全体のパターンに大きなずれはない。年数が経つにつれ、また同一個人が年を取るにつれて、文の長さが長くなる。

図 4 に示すように性差もある。黒塗りマーカーは 1、2 次共通、白抜きマーカーは 2、3 次共通のサンプルで、実線が女性、点線が男性のデータである。実線の女性のほうがすべての時点で文が長い。また第 1 次から第 2 次にかけて女性の上昇が際立つ。女性のほうがおしゃべりだという世間の評判 (ステレオタイプ) に合致する。ただし情報量に違いがあるか、繰り返しが多いか、無駄な情報も口にしてしているのか、敬語的表現 (おっしゃる、ていただく) を多く使うか、などについては、答え (反応文) を分析しなおす必要 (および価値) がある。

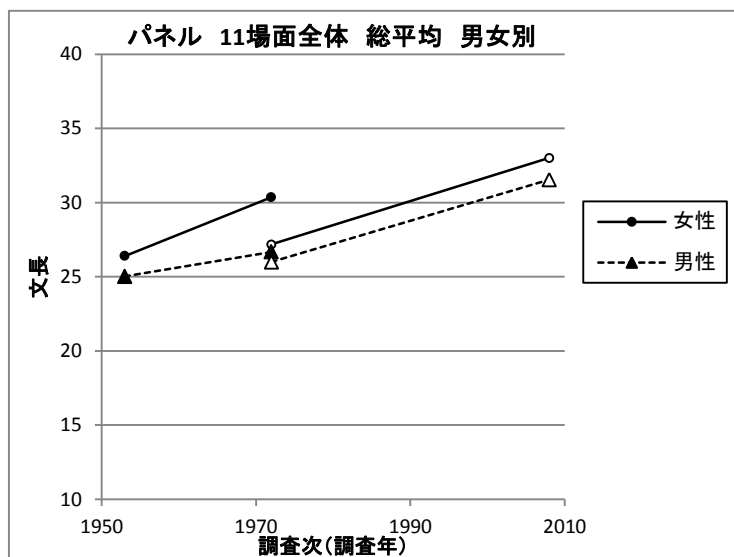


図 4 文の長さ 11 場面総平均男女別

3. 第 1, 2, 3 次パネルの個別考察

3.1. パネル調査の文の長さ 第 1, 2, 3 次全話者

以下ではパネルサンプル個人ごとの値の変化を考察する。まず第 1, 2, 3 次を通して協力の得られた 20 人について考察する。

図 5 に 3 回の調査を通して協力の得られた 20 人（ただし一人は第 1 次と第 3 次の協力）の文の長さを示す。資料集 14 の図 3 の全パネルサンプルのうちから抜き出したデータに相当する。資料集 14 の図 3 では一人を 1 本の線で表し、調査次を 2, 3 の数字によって示した。矢印のような効果があると期待したが、3 回の調査で増えたか減ったかははっきり見えず、減った人を探し出して、手動で実線を点線にした。

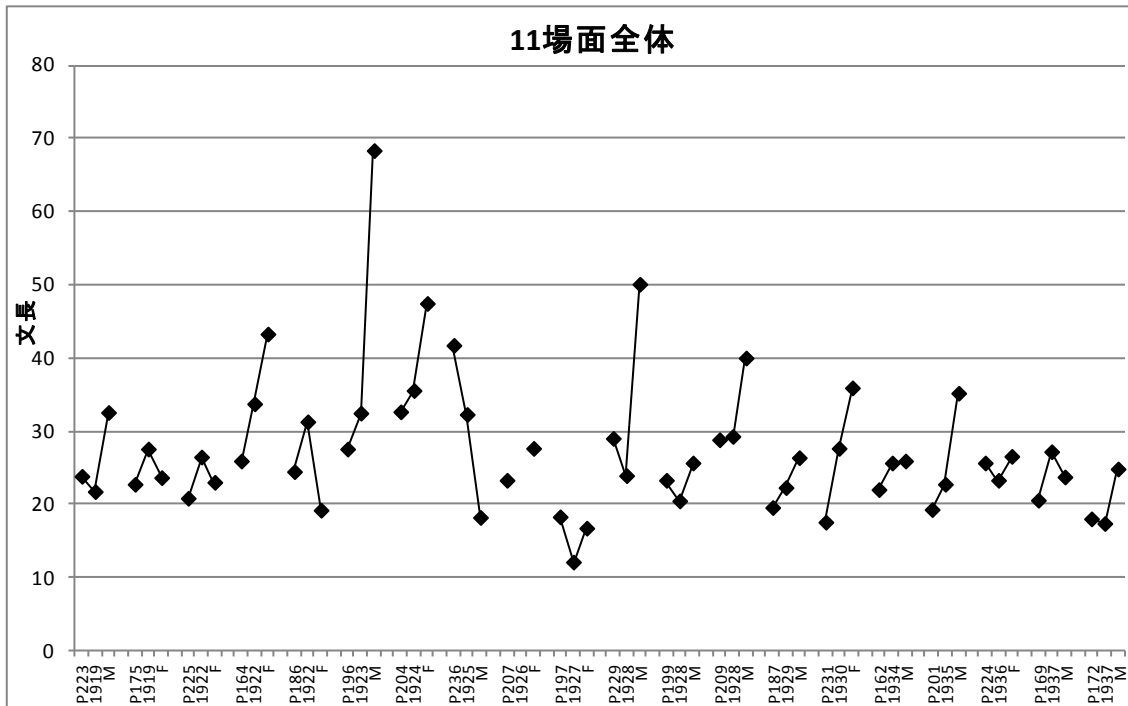


図 5 文の長さ 11 場面 平均第 1 2 3 次共通パネルサンプル

図 5 の場合は、人数が少ないので左右の余裕があり、一人に 3 つの位置を与えることができた。下端の凡例では分かりにくいだが、一番左の人を例に説明する。話者 ID 番号 P (パネル) 223 で、1919 (大正 8) 年生まれの M (男性) で、三つの◆は第 1 次、第 2 次、第 3 次における文の長さを示す。第 1 次から第 2 次にかけて少し短くなったが、第 3 次には 1.5 倍ほどに長くなった。このように 20 人すべての趨勢を個別に読み取ることができる。

話者の配列は、生年の順である。生年実年代を散布図の技法によって忠実に示すという技法を採用していないので、1922 年前後生れの人が固まって、1930 年代前半生れ (戦時中

の10代前半)の人が欠けていることは読み取れない。

しかしほぼすべての人が右上がりの線を描き、第3次に長く表現するようになったという動きは読み取れる。一部に中高型や凹型を示す人もいるが、字数の違いは少ない。

3回の調査を通じてデータの得られたまれな人々全体として、のちになるほど長くなるという傾向は、視覚的に確認された。ここで使った一人の値を調査次ごとに左右にずらして表示する技法は、他にも応用できる。生年実年代を使って、忠実に表示することも可能である。

3.2. パネル調査表示の技法

図6以下に散布図の技法により提示する。縦軸は文の長さをモーラ数で示す。横軸は話者の生年実年代を示す。月まで考慮することにより、全員を判別できた。横軸上の位置は、各グラフの早いほうの調査次(1、2次追跡調査の1次、2、3次追跡調査の2次)の値は話者の生年実年代で示し、遅いほうの調査次の値はそれに1を足した値で示した。つまり、遅いほうの調査次の値は右に1年分ずらして表示した。これにより、文の長さが増えた場合は右上がりの線に見え、減った場合は右下がりの線に見える。資料集14では、減少の人を目で探して、線を手作業で点線に変えたが、手間がかかるし、実線と点線の違いも、目立たなかった。その欠陥が救われたことになる。

以下の図は2グループに分かれる。一つは第1次から第2次までの追跡パネルサンプル、もう一つは第2次から第3次までの追跡パネルサンプルである。

第1次から第3次までの調査次を数字のラベルで示した。ただし第1、2次の追跡サンプルの第1次の数字は省いた。また第2、3次の追跡サンプルの第2次の数字は省いた。これにより、線を矢印のように読み取ることができる。

3.3. パネル調査の文の長さ 第1、2次話者と第2、3次話者

図6-1の大部分の線は右上がりである。つまり第2次調査全体で文が長くなった。中でも長いのは中年層で、高齢者と若い人は短い。後の調査で確かに文が長くなる。右下がりの線は1900年以前生まれの人と1920年以後生まれの人(第1次調査ですでに高齢だった人と若かった人)に多い。中間世代の人は、文がさらに長くなる傾向があるらしい。

図6-2は、2次調査全員のうち3次のパネル調査の対象になった話者と3次調査のパネル話者のデータである。1次から3次まで参加している20人は図6-1のグラフと重複して図化されている。ここでも右上がりの線が目立ち、後の調査で文が長くなる傾向が見られる。老年層が長く、また若年層もやや長い。第2次と比べて全体として文が長くなっている。

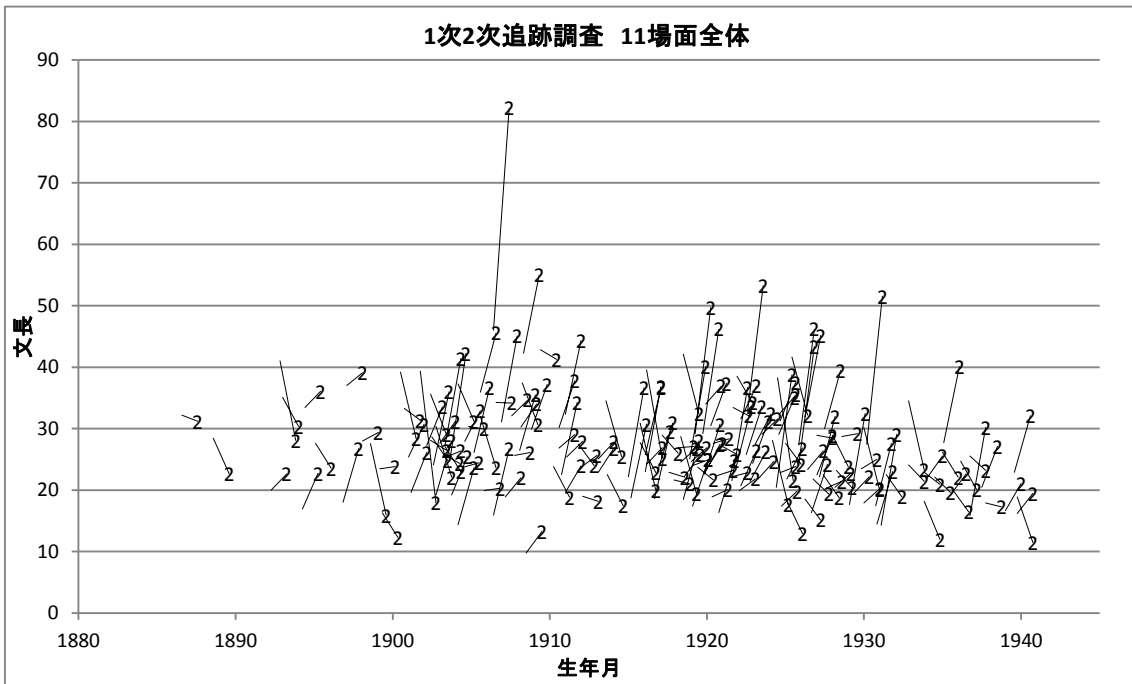


図 6-1 1、2 次追跡調査 11 場面全体

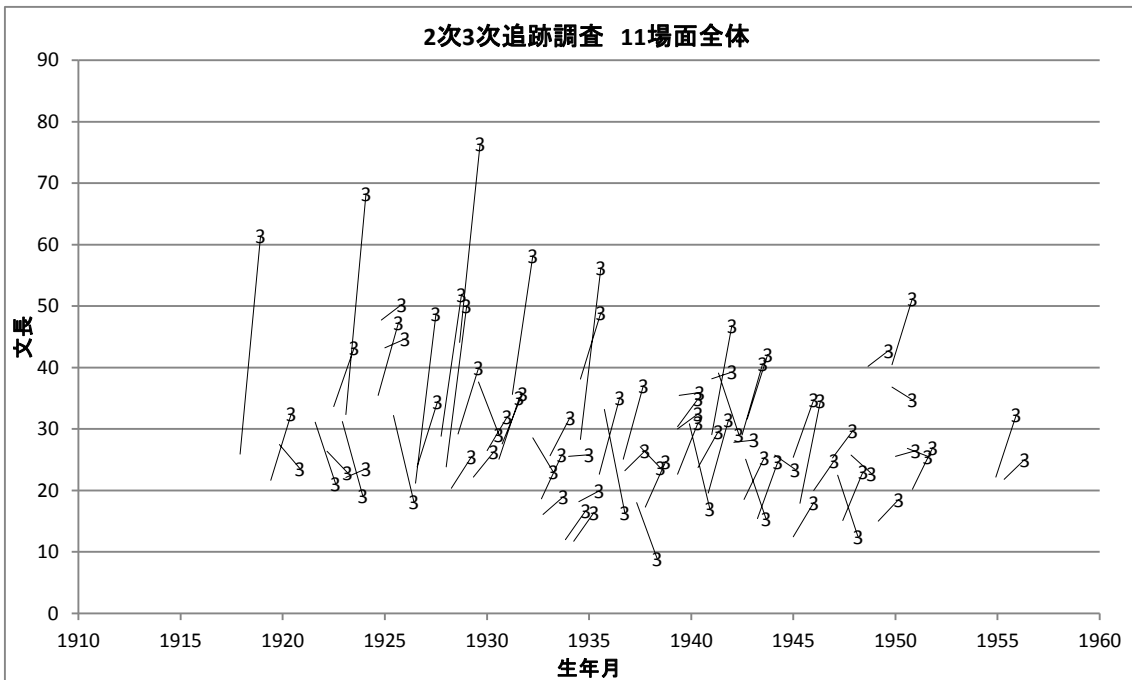


図 6-2 2、3 次追跡調査 11 場面全体

3.4. パネル調査の文の長さ 第1、2次、第2、3次の男女差

図6-3、図6-4で、第1、2次調査の男女に分けて2枚で表示する。下のグラフ、女性のほうが第2次で長くなっている。

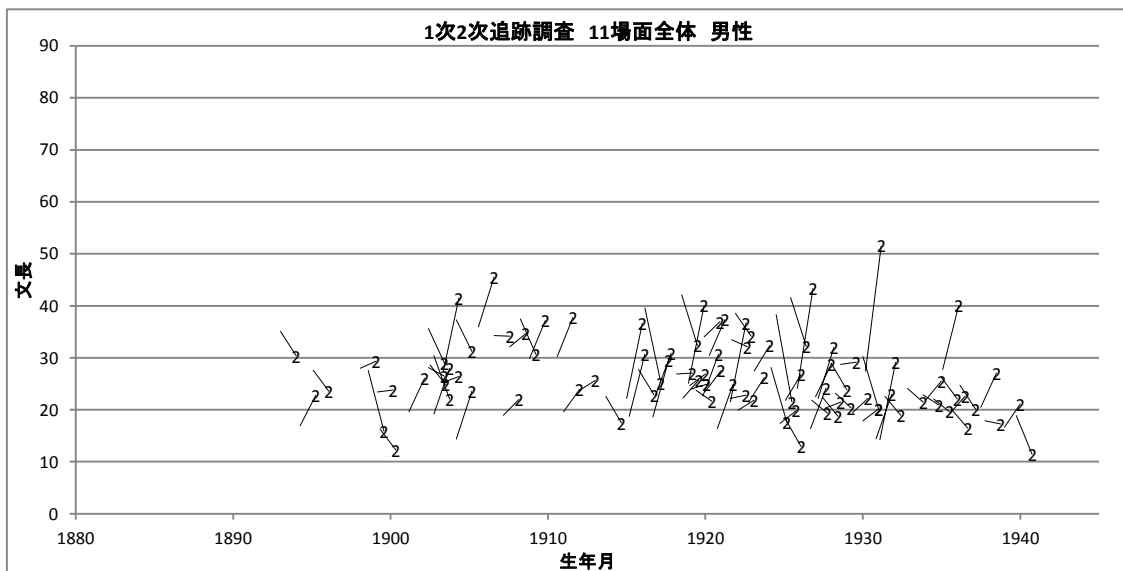


図6-3 1、2次追跡調査 11場面全体 男性

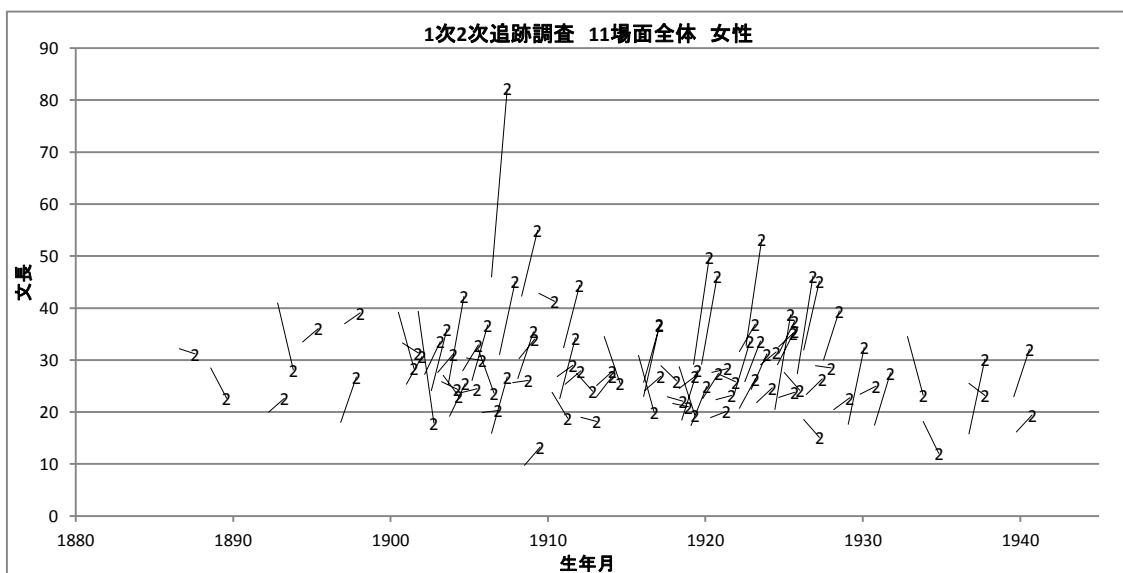


図6-4 1、2次追跡調査 11場面全体 女性

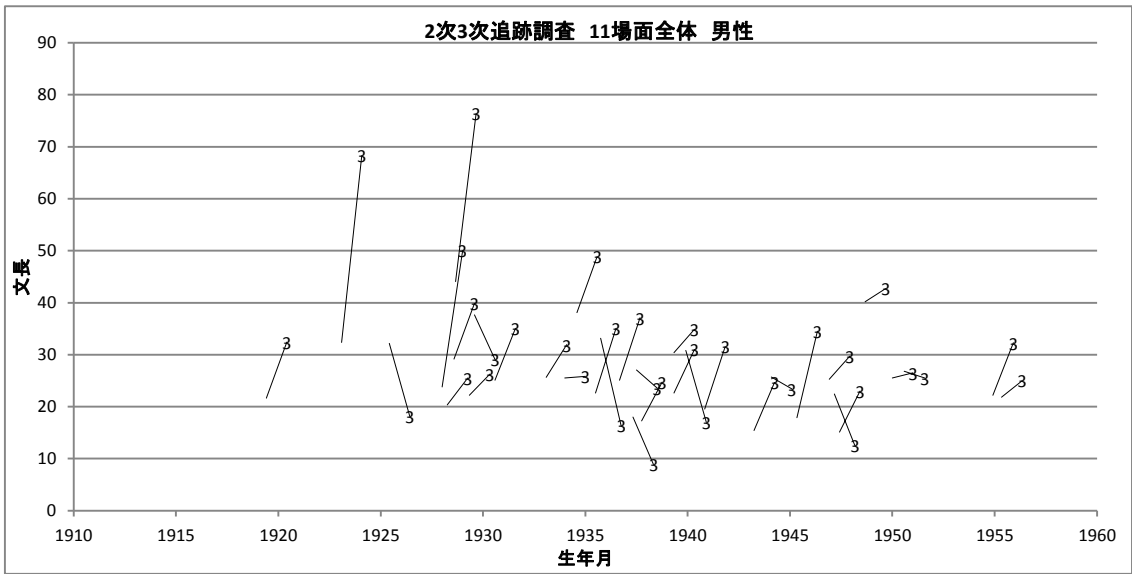


図 6-5 2、3 次追跡調査 11 場面全体 男性

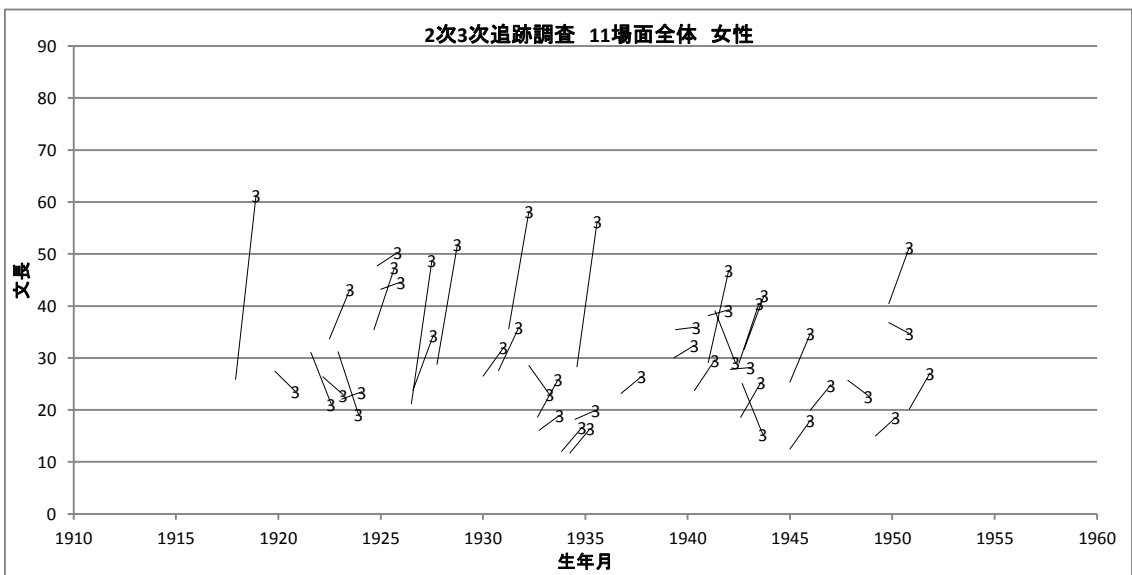


図 6-6 2、3 次追跡調査 11 場面全体 女性

図 6-5、図 6-6 で、同じく第 2、3 次調査の男女に分けて 2 枚で表示する。人数が少ないので用心すべきだが、上のグラフ男性は個人差が大きく、高年層には顕著に長くなった人がいるが、短くなった人が散発的に見つかる。女性はそろって長くなっている。

以上の散布図により、図 4 の男女別平均値で見られた傾向を、個人レベルまでさかのぼって視覚化して確認できた。

4. 長さの追跡調査（12項目）

以下図7では12項目それぞれの散布図を提示する。第1、2次の共通サンプル，第2、3次の共通サンプルに分けて，ペアとして上下に表示する。線の角度と，矢印に代わる2，3の数字とで，長くなったかどうかの判別をする。

101 道教え

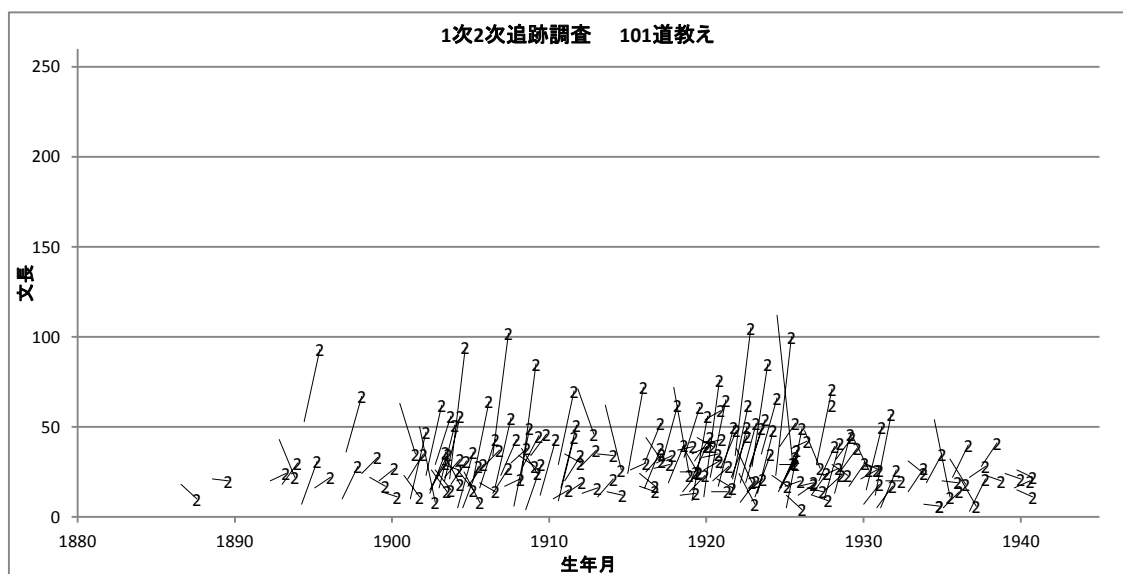


図7-1a 1、2次追跡調査 101道教え

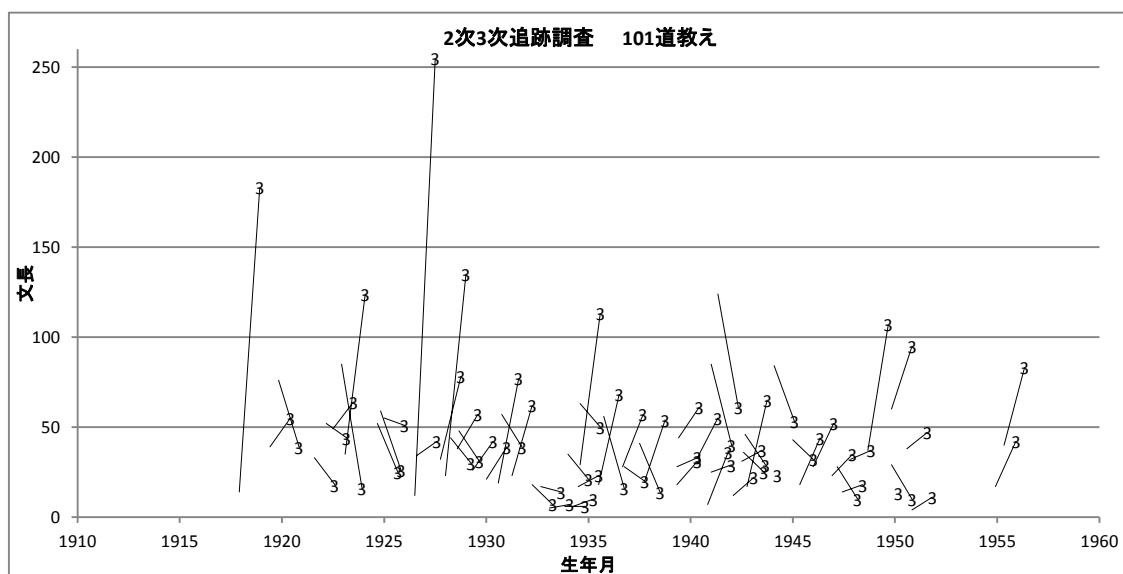


図7-1b 2、3次追跡調査 101道教え

第3次で際立って長い人が増えた。よそから来た人のために具体的に道を説明する人が増えた可能性もある。しかし短くなった人もいる。

102 電報振込

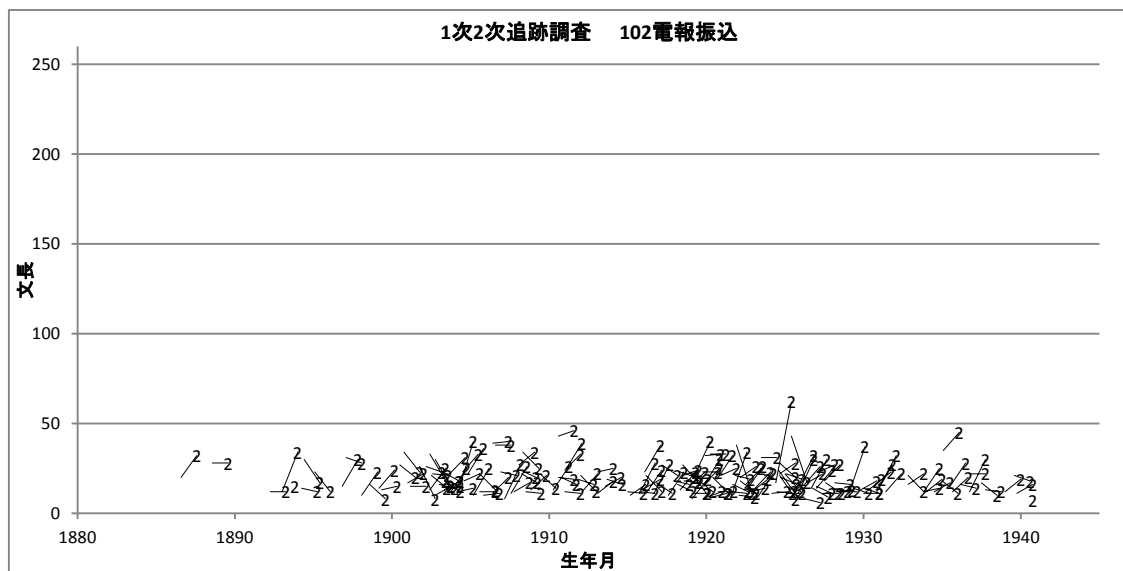


図 7-2a 1、2次追跡調査 102 電報振込

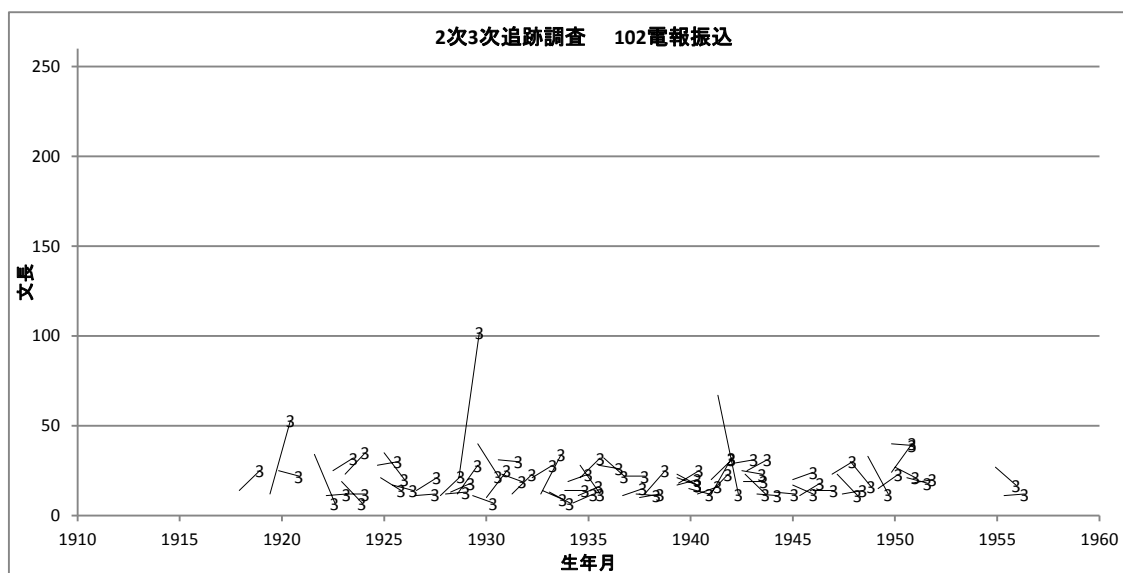


図 7-2b 2、3次追跡調査 102 電報振込

全体として簡潔である。2次から3次にかけて長くなっている理由としては、場面が電報用紙から振込用紙に変わったこと、時勢が変わってこの場面での依頼行動が変わったことも考えられる。

103 荷物預け

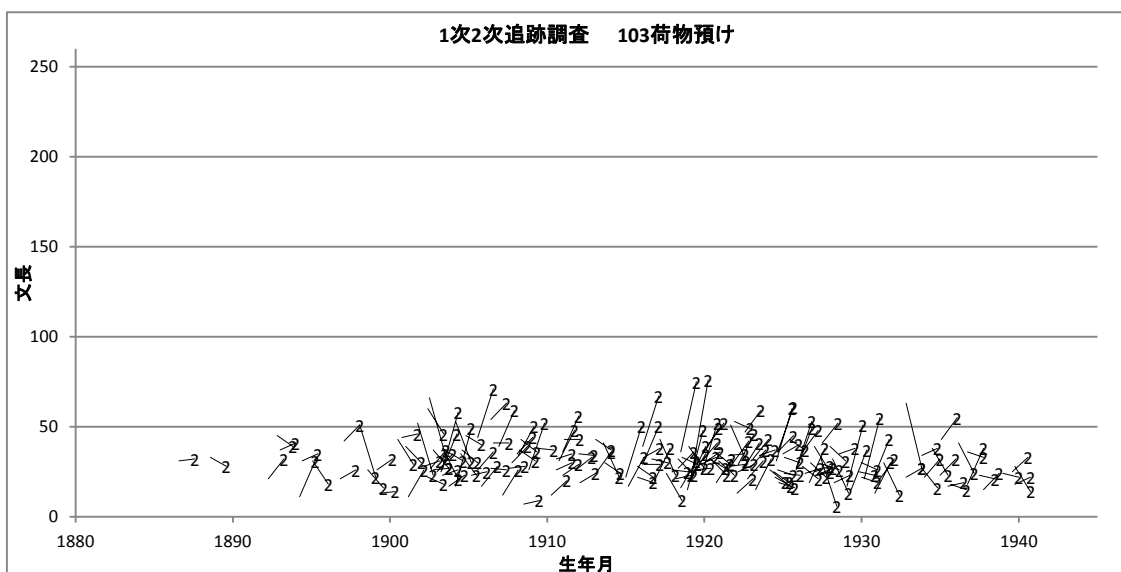


図 7-3a 1、2 次追跡調査 103 荷物預け

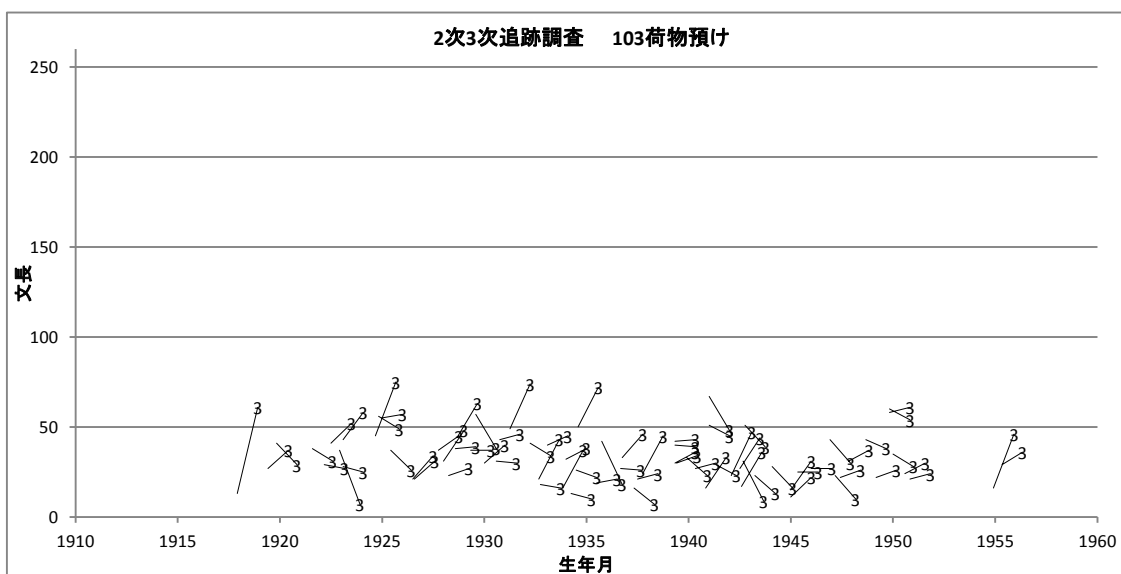


図 7-3b 2、3 次追跡調査 103 荷物預け

予期したよりも長くなっていない。昔に比べて荷物を預けるという行動が少なくなり、負担度が増したと考えたが、そう長くない。「ていただく」のような具体的な言語表現の使用が増えたが、談話として様々なことを話して相手の理解を求めるわけではなさそうである。

104 傘忘れ

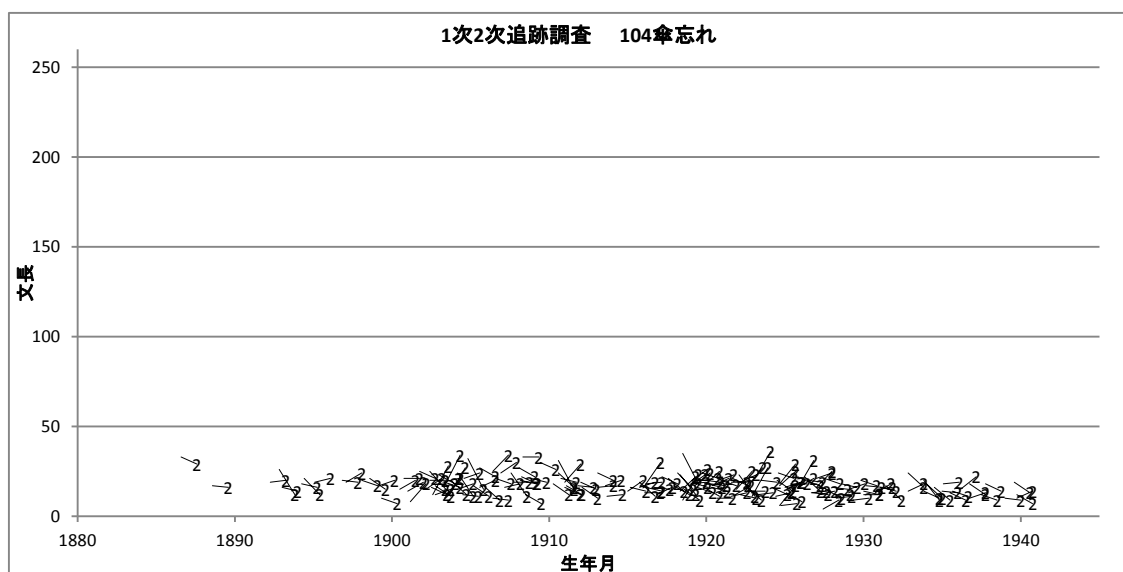


図 7-4a 1、2 次追跡調査 104 傘忘れ

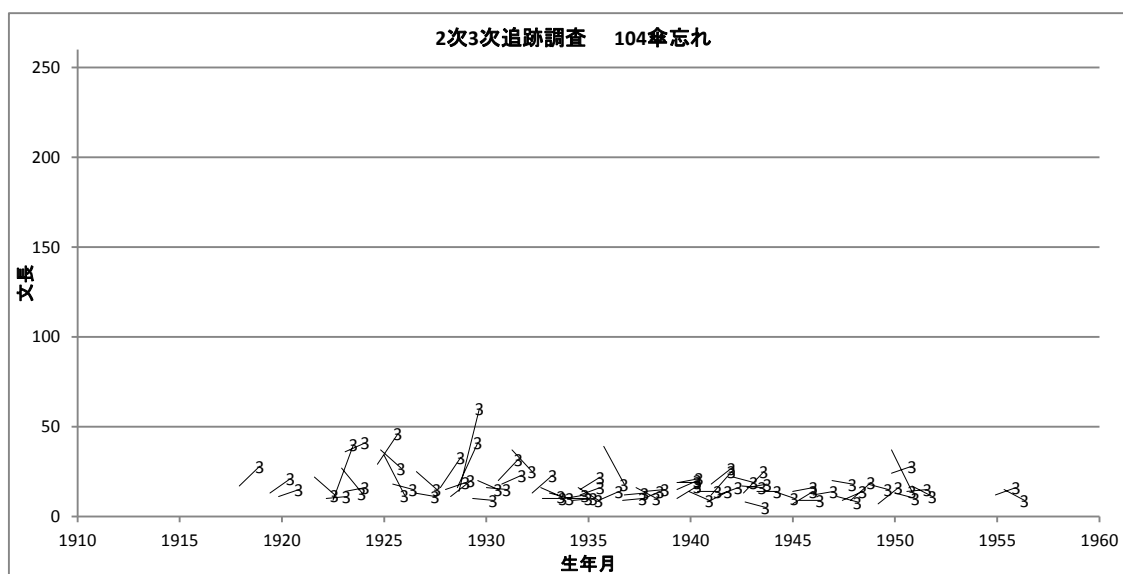


図 7-4b 2、3 次追跡調査 104 傘忘れ

予期したよりも長くなっている。単純な声かけですみそうな場面だが、昔に比べて長くなった。

105 先生

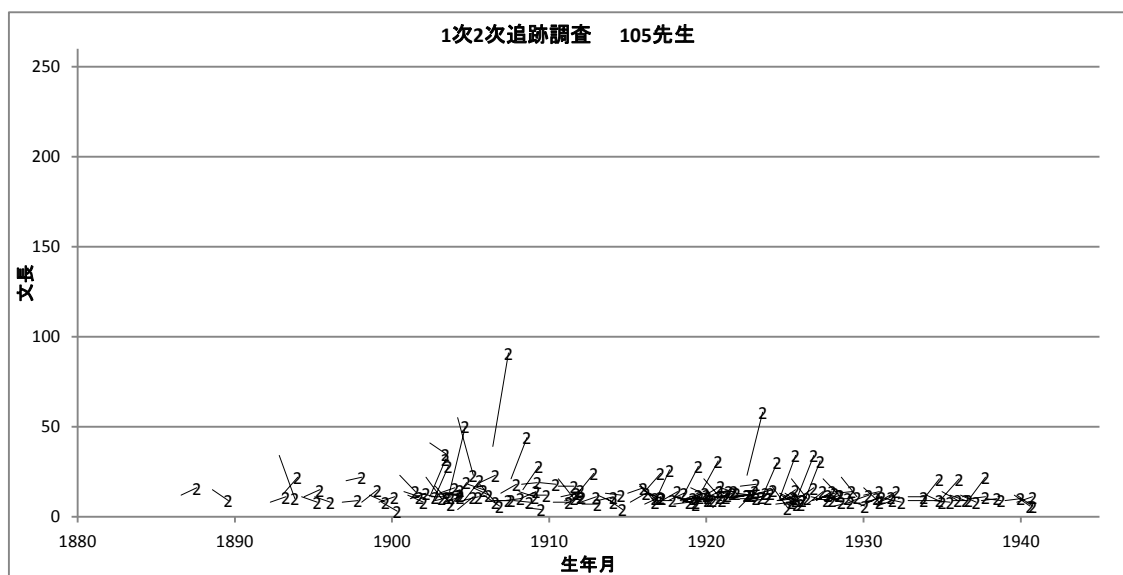


図 7-5a 1、2次追跡調査 105 先生

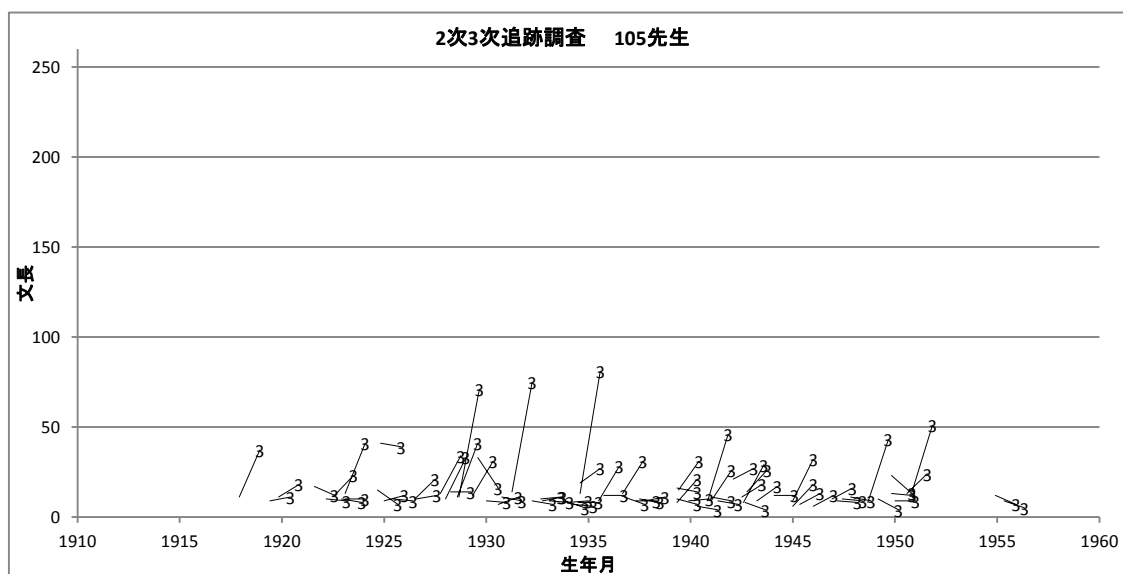


図 7-5b 2、3次追跡調査 105 先生

予期したよりも長くなっている。個人差があるが、昔に比べて先生に対して長く説明する人が多くなった。

106 電灯新聞

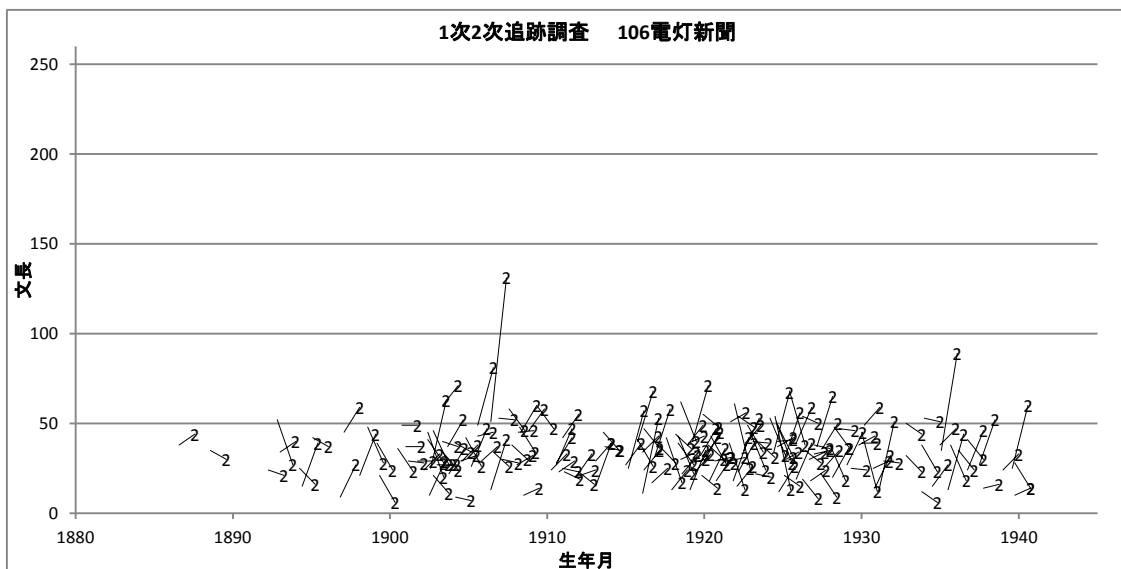


図 7-6a 1、2 次追跡調査 106 電灯新聞

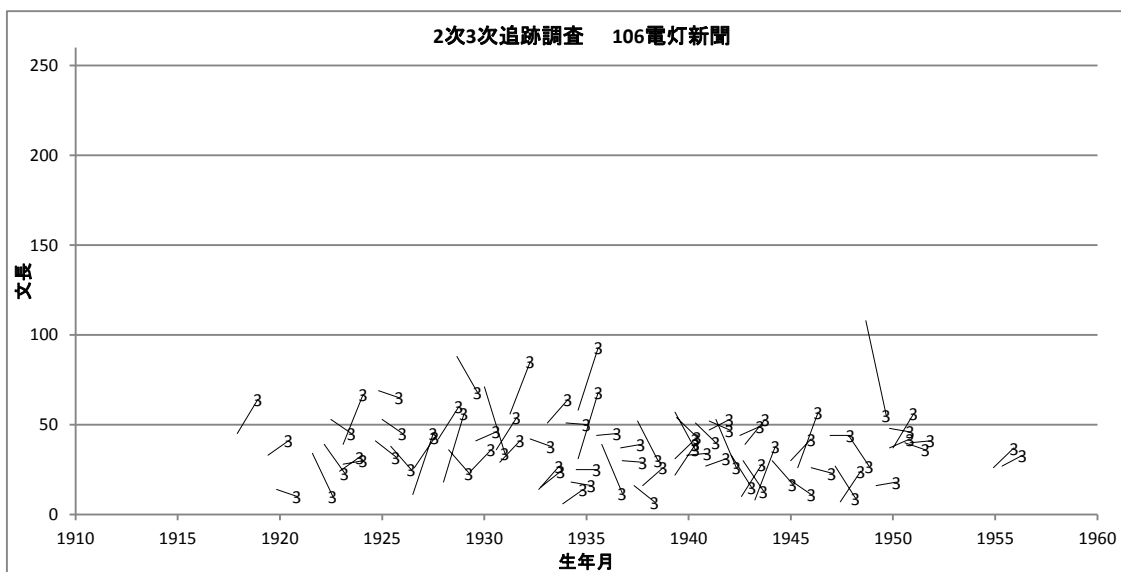


図 7-6b 2、3 次追跡調査 106 電灯新聞

個人差が大きい。第 1 次から第 2 次にかけて特に長くなった人がいる。一方第 2 次から第 3 次にかけては短くなった人もいる。電灯代と新聞代で事情が違うし、自動振り込みやコンピュータ処理が普及して調べやすいなどの社会的事情が働いたことも考えられる。

107 議事堂

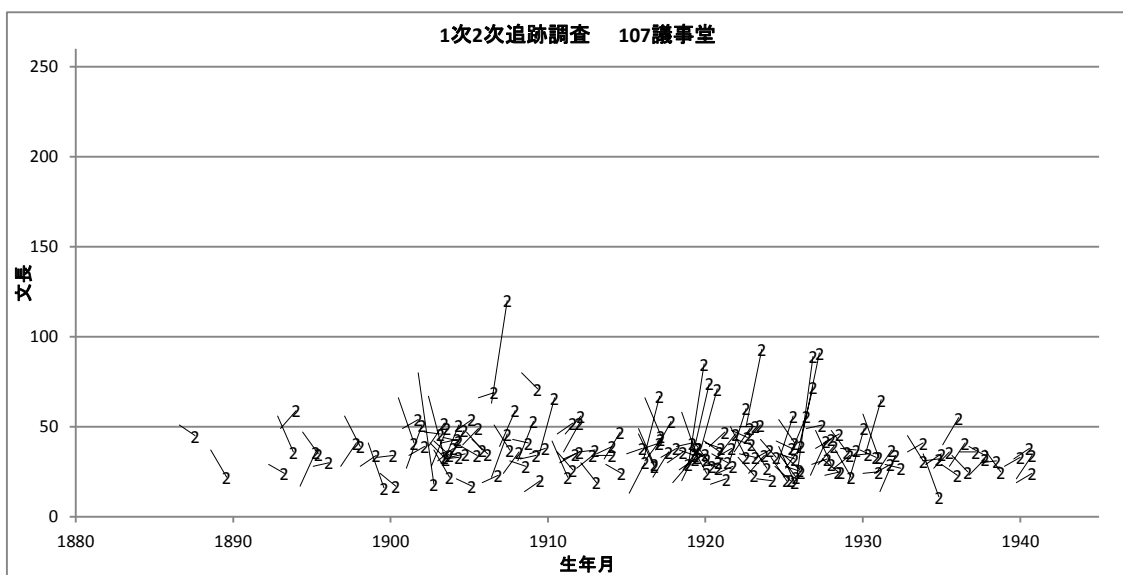


図 7-7a 1、2 次追跡調査 107 議事堂

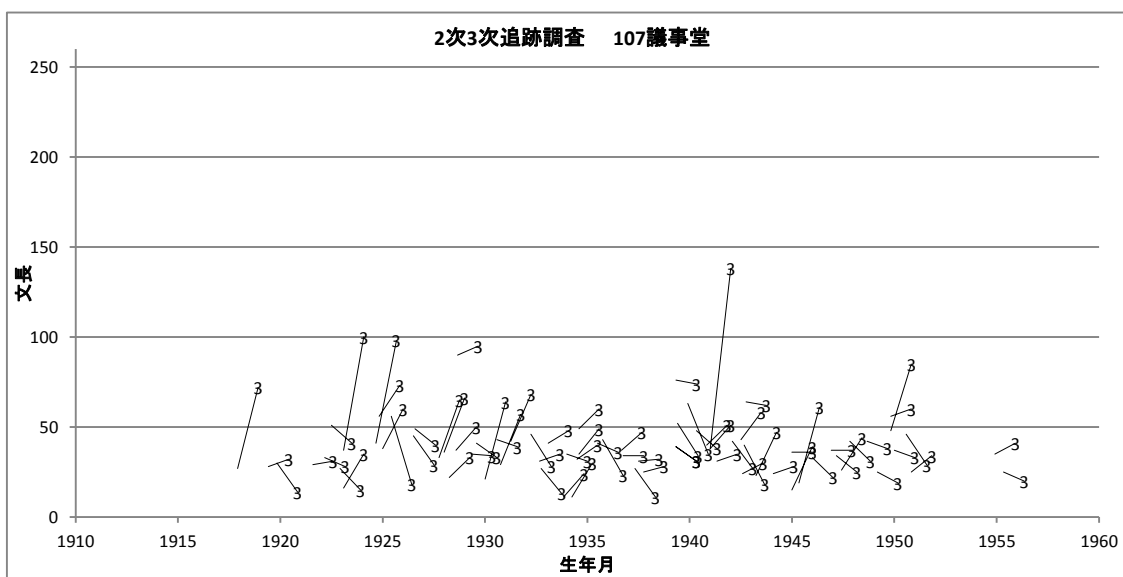


図 7-7b 2、3 次追跡調査 107 議事堂

唯一東京での場面である。予期したよりも長くなっている。単純な道聞きの質問ですみ
 そうな場面だが、昔に比べて長くなった。

108 医者

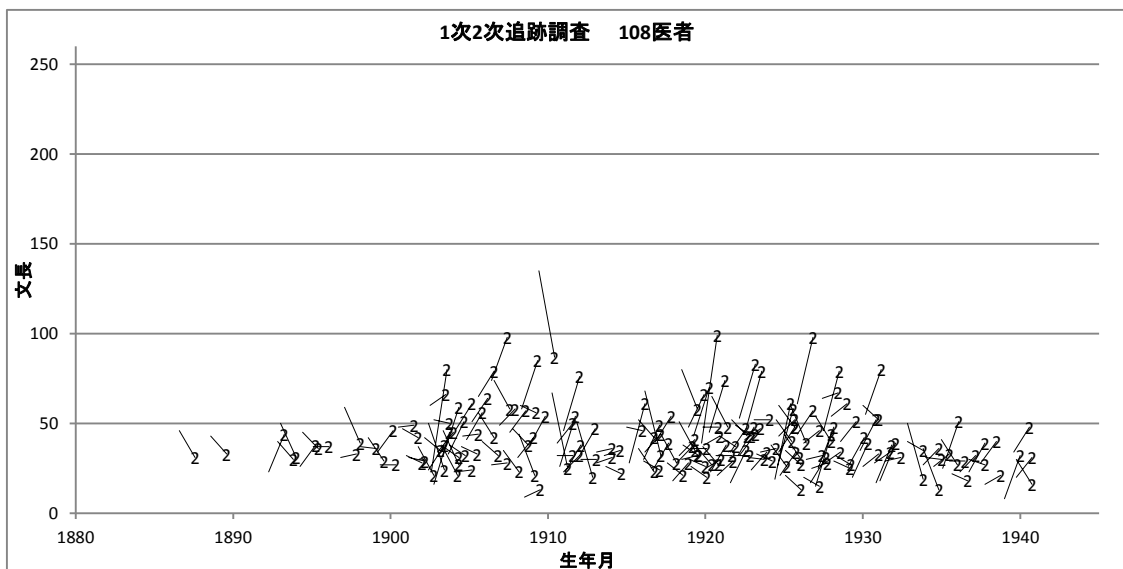


図 7-8a 1、2 次追跡調査 108 医者

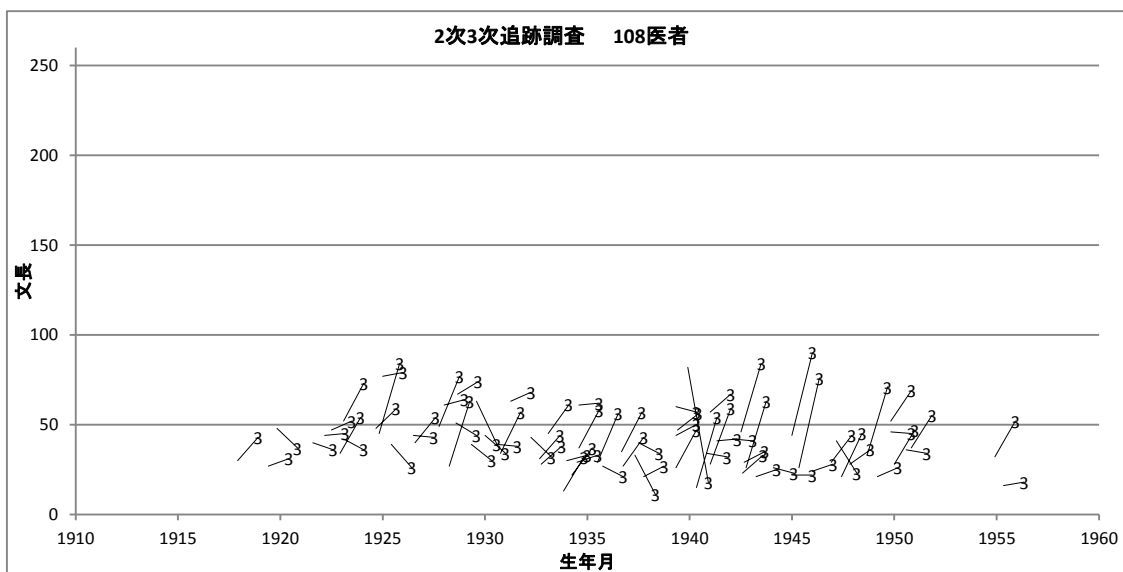


図 7-8b 2、3 次追跡調査 108 医者

予期したよりも長くなっていない。昔に比べて往診という行動が少なくなり、負担度が増したと考えたが、そう長くない。むしろ短くなった人が目立つ。「ていただく」のような具体的な表現の使用が増えたが、談話として様々なことを話して相手の理解を求めるわけではなさそうである。

109 席譲られ

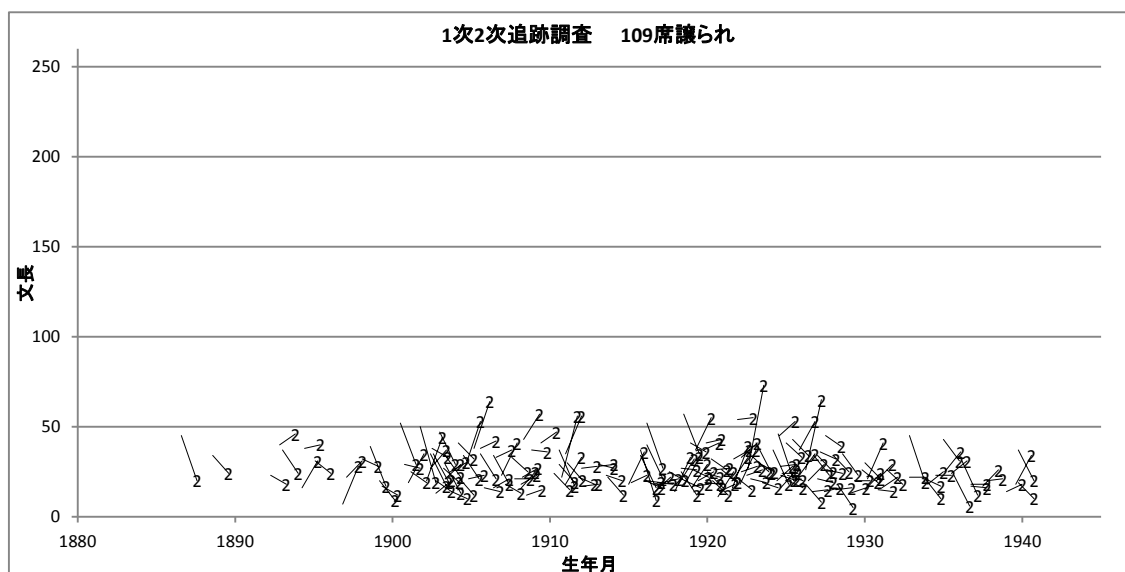


図 7-9a 1、2次追跡調査 109 席譲られ

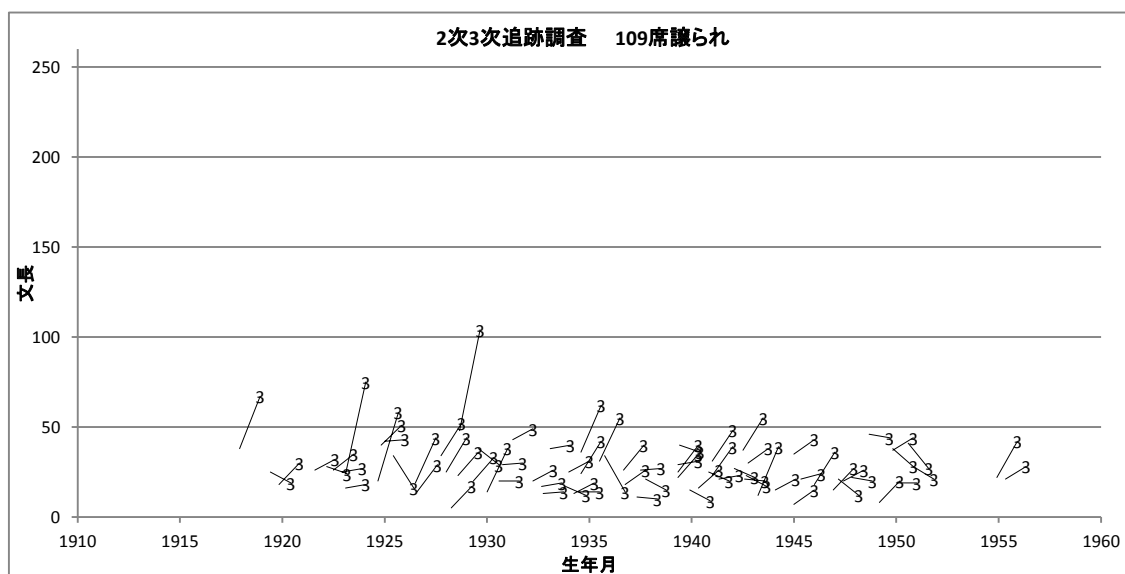


図 7-9b 2、3次追跡調査 109 席譲られ

予期したよりも長くなっている。単純なお礼のことばですみそうな場面だが、昔に比べて、特に第3次で長くなった。

110 おつり

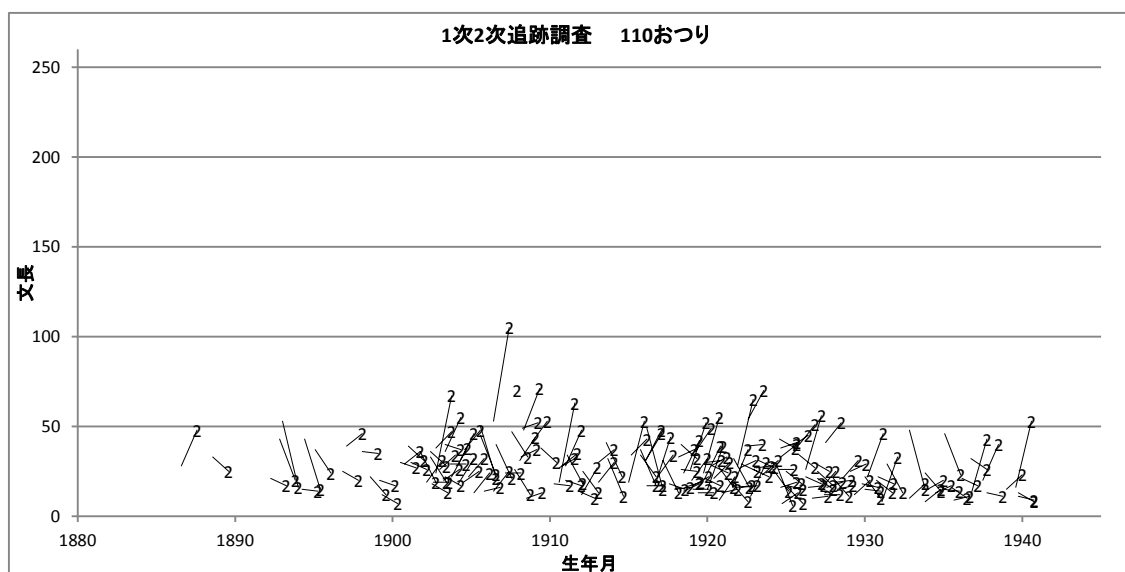


図 7-10a 1、2 次追跡調査 110 おつり

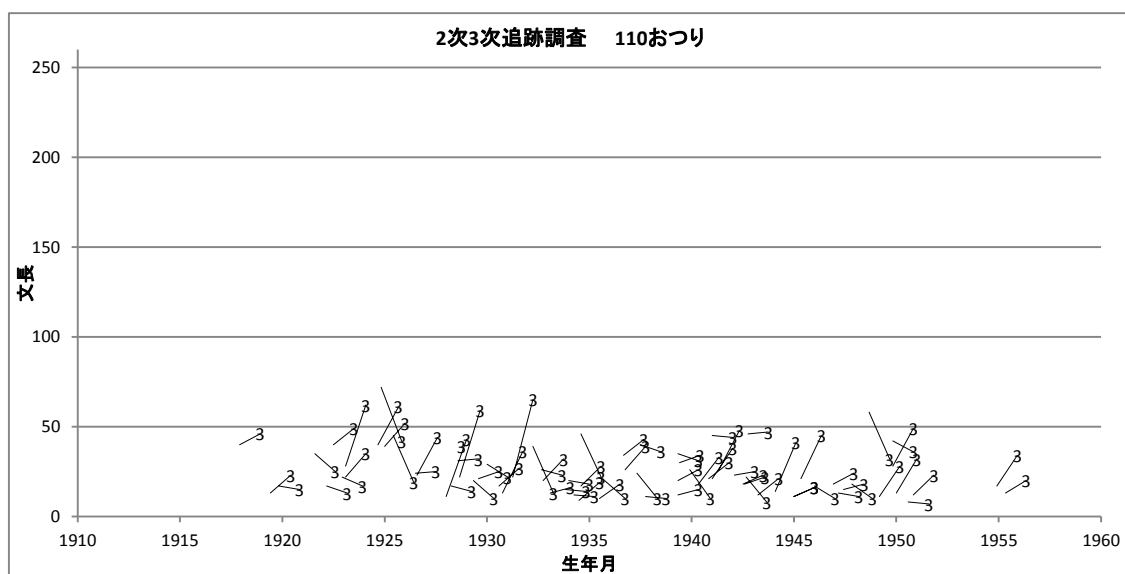


図 7-10b 2、3 次追跡調査 110 おつり

個人差が大きい。むしろ短くなった人が目立つ。

111 傘貸し

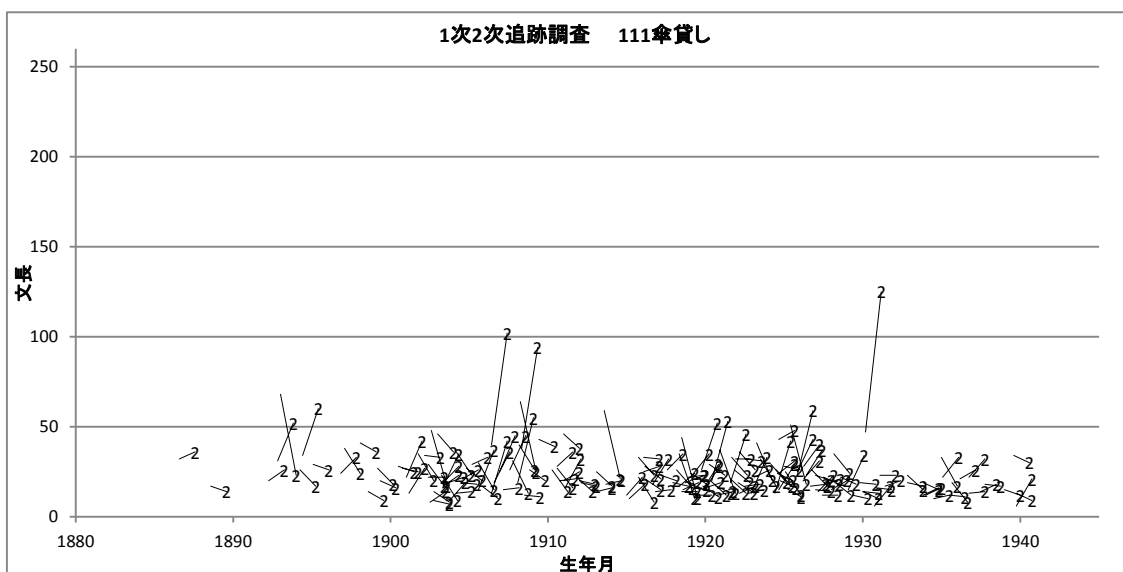


図 7-11a 1、2次追跡調査 111 傘貸し

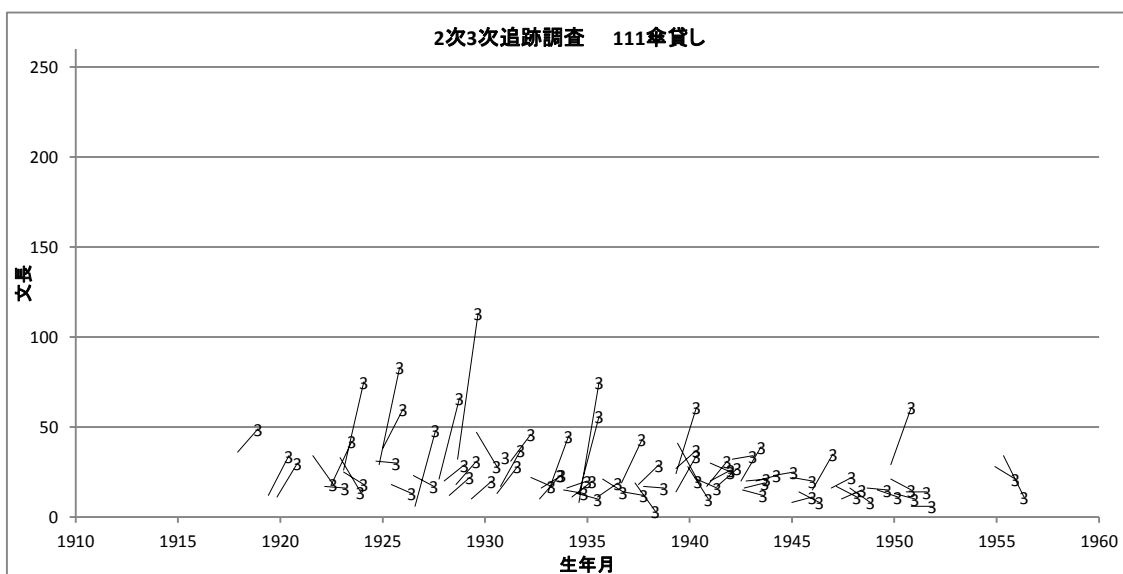


図 7-11b 2、3次追跡調査 111 傘貸し

個人差があるが、昔に比べて長く説明する人が多くなった。談話として様々なことを話して相手の理解を求めることが多くなったのか。

5. 結論 現代の言語変化

以上のパネル調査（同一人物追跡調査）で、同じ人が 19 年後、36 年後に同じ中身を伝えるのに長く話すようになったことが示された。文が長くなるのは、岡崎の住民構成が変わった（よそものが増えたために、例えば道案内のときに詳しく説明するようになった）という理由ではないと推論できる。これこそ同一人物を追跡して行うパネル調査の価値である。実時間の差が分かるし、個人の経年変化、加齢変化が実証できた。しかもかなりの（100 人前後の）人数の全体的傾向が把握できた。

この報告書では、パネルサンプルにおける 3 次にわたる調査の変化を考察するために、従来の平均値を計算する手法などに代えて、個人の数値を散布図で表現する技法を適用した。回答文が長くなるという経年変化が再確認できた。世の中の状況が変わったために長く話す必要が生じた可能性もあり、言語的に長くなる表現が普及したためもある。また対人配慮のための要素が多く使われるようになったとも考えられる。さらに加齢によって長話をするようになったこともありうる。これらの要因の一部の可能性についてはすでに論じた。他の可能性については、さらに具体的データの分析を通じて解明を目指す。

加齢変化には様々なものがありうる。敬語の成人後採用はそのうちの 1 種にすぎない。1 個人の *idiolect* の変化にあたるもので、長年の著作・日記などの追跡や異なった時期の録音録画資料によって、書きことば、話しことばの変化を確認できる。また「記憶時間」を利用して、本人の記憶・思い出を内省してもらうことにより、著作や録音のない普通の人の生涯変化も研究できる。年齢という「見かけ（の）時間」、（繰り返し）調査時点による「実時間」以外にも、現代の言語変化を知る手段はある。実践の結果も多い。研究史展望と理論的考察は別稿に譲る。

グラフはすべて柳村による。なお本報告について、岡崎市の方々に大いにお世話になった。厚く御礼申し上げる。

参考文献

- 朝日祥之 (2008) 『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』(ひつじ書房)
井上史雄 (2011) 『経済言語学論考』明治書院
井上史雄(2014.12.) 「昭和の方言 鶴岡と郊外の言語変化」 日本語学 32-15 pp.16-24.
井上史雄(2015.2 「敬語の成人後採用」 『国語研プロジェクトレビュー』5 巻 3 号 pp.98—107
井上史雄 (2015 年 3 月 8 日) 「大規模経年調査から岡崎敬語調査パネルサンプルの生年順表示」 大規模経年調査研究発表会
国立国語研究所 (1958) 『敬語と敬語意識』(秀英出版)
国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識 — 岡崎における 20 年前との比較—』(三省堂) .

国立国語研究所（2010）『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』科学研究費補助金研究成果報告書 第1～4分冊.

岡崎敬語調査資料集 15

Material for Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

岡崎パネル調査の文の長さ 2

—繰り返しデータの斜め表示技法—

Length of Sentences in Panel Surveys of Okazaki 2

Slant representation of repetitive survey data

(Ver. 1.1)

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

Comprehensive Research

Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

著： 井上史雄 ・ 柳村裕

INOUE Fumio, YANAGIMURA Yu

発行：平成 27 年 6 月 24 日 24 June 2015

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2 Tel. 042-540-4300 (代)

10-2 Midori-cho, Tachikawa City, Japan 190-8561